



2021年（令和3年）が終わろうとしています。決して穏やかな日々ではなかったけれど、希望を感じて2022年（令和4年）に向かおうとしている自分があります。みんなが、自分の周りの人々が元気であれば良い。それだけ。

夜も白く明るい季節がやって来ました。Xmas、年末からお正月にかけてはいつも胸がときめきます。限られた特別な期間という気がします。ちょうど旅に出る直前のワクワク感と、途中の夢のような時間と、過ぎてしまった直後の少しのさみしさと。

新たな日々がやって来ます。それは毎日なのだけれど、この時期はやっぱり特別な期間なのです。良い一年にしたい。ただそれだけです。



教育委員リレーエッセイ

『優しい絵本に魅せられて』

今金町教育委員 船木 恵

いよいよ本格的な雪のシーズンがやって来ました。凜とした空気の中で、冬独特の匂いや白く輝く風景にこの季節の訪れを感じる方も多いのではないのでしょうか。

少し落ち着きを取り戻したコロナ感染症ではありますが、まだまだ出歩くことの不便な日常です。振り返るとたくさんあった時間なのに、その日の生活に振り回され、ゆっくりと楽しみだった読書からも遠のいていたことに、もったいなさを感じる今日この頃です。

そんな日々の中、最近ふと立ち寄った書店で“だれの心にも入り込み、いつでも力をくれる永遠の人生寓話”と帯に記された『ぼく モグラ キツネ 馬』というアート絵本に出会いました。想像の世界を膨らませてくれるペン1本で描かれたイラスト、聞き慣れた易しい言葉で書かれたストーリーの中に、人としての生き方も日々の暮らしの細やかな大切さも気づかせてくれる素敵な一冊。

「ほとんどすべてのことは内がわでおこるのに、オイラたちには外がわしかみえないのって、おかしくないか？」（文中より）

「とてもきれいなものを、みのがすな」（文中より）



微かに聞こえる声に耳をすまし、自分の心の声をしっかり聴き、相手を尊重し、思いを共有し、一緒に考える。

この絵本はあらためて、いくつもの大事を教えてくださいました。

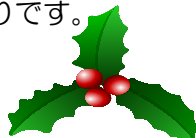
多様な社会で生きる今、生きることの意義・幸福とは何か、大切さの価値観、悲しみの意味、素晴らしい発見、未来の創造……子どもでも大人でも読者に寄り添いながら深い気づきを与えてくれる絵本が他にもたくさん存在することに今更ながら驚いています。

「なにかが、おきたときにどうふるまうか。それこそが、オイラたちにあたえられている、さいこうのじゆうってもんさ」（文中より）

こんな一文にも元気がもらえます。

どんな年齢であれ、絵本からもたらされる豊かさには終わりがありませんね。

与えられた時間を無駄にすることなく、また来年も良き絵本に出会う楽しみを大切に、と思う冬の始まりです。



※『ぼく モグラ キツネ 馬』 飛鳥新社

著者 チャーリー・マッケンジー

訳者 川村 元気

